第1章

時間は
ミルフィーユ

ああ、やっぱり自分はタイムトラベラーではないのだと、現実を突きつけられた気がした。

二〇一九年の年末に札幌で開催するイベントのタイトルを考え始めたのは、夏の終わりごろのことだった。きっと十二月下旬には、札幌の街は本格的な雪景色になっているに違いない。しんしんと大粒の雪が降りつもって、その様子は、街の人々に時間の流れや季節の移ろいを感じさせてくれるはず。そう思い、イベントのタイトルを「降りつもるじかん」に決めた。しかし、いよいよ当日になってみると、この年はなんと記録的な暖冬で、例年に比べ雪もかなり少なく、なんだか全然「降りつもる」という感じではなかった。タイムトラベル専門書店を営んでいるくせに、全然未来が読めていない自分が少し恥ずかしかった。

「降りつもるじかん」は、タイムトラベル専門書店が企画する、音楽ライブを中心としたイベントだ。バンドもやったりしている店長の私がボーカルをつとめ、タイムトラベルにちなんだ名曲のカバーや、オリジナル曲を演奏するだけでなく、当店のデザイン担当で絵本作家のなかいかおりさんによる絵本の読み聞かせ、文具担当の比留川香さんによる文房具のプレゼンコーナーなどがある。会場はなんと、札幌市時計台ホール。タイムトラベルにうってつけの場所だ。映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』でも、時計台に落ちる雷をタイミングよくつかまえることでタイムトラベルを試みるシーンがある。何かが起こりそうで、わくわくしてくるではないか。

札幌市時計台は、しばしば「がっかり観光スポット」と呼ばれることもあるが、それは時計台の中に入ったことがない人の感想だと言いたい。私は怒っています。たし

かにビルが建ち並ぶ都会の真ん中にある時計台は、その知名度の割にはこじんまりとした印象を受けるかもしれない。しかし、そのこじんまりにも歴史があるのだ。札幌市時計台は、現在の北海道大学の前身、札幌農学校の演武場として一八七八（明治十一）年に建てられた。当時の札幌の人口はおよそ三〇〇〇人。まだ生まれたての、小さな街だった。時計台が小さいのではなく、札幌が大きくなったのだ。当初、農学校本館と演武場は別々に建てられる案が出されたが、財政上の理由などからふたつの建物を一棟にまとめ、木造の二階建てとして設計されることになった。一九〇六（明治三十九）年、農学校の移転のあとに演武場を札幌市が買い上げることになり、そこから時計台と呼ばれることになった。以降、戦時中をのぞき、図書館や公会堂としても市民に親しまれてきた。開拓精神の原点であり、札幌の街を初期からずっと見守ってきた存在といえる。しかも、機械式の時計装置はほとんど当時の部品を交換することなく正確に時を刻み続け、二〇二一年で一四〇年になる。建物、時計装置ともに重要文化財に指定され、国内現存最古の塔時計として機械遺産にも登録されている。建物の中に一歩足を踏み入れれば、一秒一秒確かに刻んできた歴史の重みをその空気から感じることができる。それなのに、外観だけ見て「けっこう小さいね」などと言いながら写真撮影用の台で自撮りだけして帰る観光客が多い。私が友人に札幌を案内するときは、できるだけ時計台の中まで連れて行く。一階では、ちょっとパネルを読めばわかるうけ売りの沿革を偉そうに語りあげ、二階に上がると「あそこの隅に小さな自動販売機があるのがわかる？　あそこで売ってるペットボトルの水は『さっぽろの水』と言って、おいしいと評判の札幌の水道水と同じお水なんだよ」など、小ネタも

忘れない。「え、なにそれ買ってみたい」と友人が自販機に近づいていった。売っていた水は普通に『いろはす』だった。誰かに偉そうにうんちくを垂れたいならば、最新情報に気をつけろ。

そんなわけで私は、札幌市時計台のことを常日頃からとても気に入っていた。あるときなにかの拍子に、とてもお世話になっているＳＴＶラジオのプロデューサーの大針さんから、「時計台ホールを借りてイベントができるんですよ」と教えてもらった。私は、なんだって！　そりゃあ、タイムトラベルのイベントをやるしかない！　と鼻息を荒くした。ただし、競争率が高く、申し込みには決められた日時に行われる抽選に参加する必要がある。東京在住の私たちの代わりに、大針さんは何度も抽選に行ってくださった。かなり競争率が高いのだ。初めは夏ごろイベントをやるのもいいねと言っていたけれど、会場を押さえられず、秋になり、せめて雪が降る前がいいねとなり、まあ少しくらい雪があったほうが雰囲気的にはいいかもとか言いながら、結局十二月二十七日というザ・年の瀬に落ち着いた。本業が忙しいなか動いてくださった大針さんのくじ運を責めるわけでは決してない。大針さん本当にありがとう。仕事納めの金曜日。お客さんは来てくれるのか。そんなの絶対、忘年会の日じゃないのか。やや心配しながらも時は過ぎ、あっという間に雪のあまり降りつもらない当日がやって来た。

時計台の二階ホールは、一見すると教会のような雰囲気で、部屋一面に横長のベンチが並べられている。舞台上にはグランドピアノとクラーク博士の像がある。クラーク博士といえば、札幌農学校の初代教頭で、羊ヶ丘展望台のスっと立ってどこかを指

差している像が有名だが、なんと二〇一七年に時計台にも新たに設置された。こちらはスッと立った姿とは違い、足を組んで座り、腕もベンチの背もたれに乗せて、かなりリラックスした様子だ。というか、ステージの真ん中にいるとなるとそれがなんだかちょっと態度の大きい人、みたいにみえて若干の緊張要素になる。意識し始めたらもう、どんな演奏やねん、ちょっと聞かせてみい、のポーズにしか見えない。本番はあまり見ないようにしよう。

今回のライブはボーカル、グランドピアノ、ベース、という珍しい組み合わせで、私もこれまでに経験のない編成だったが、全く不安はなかった。グランドピアノの存在感のあるふくよかな音色、足元からも感じるベースの力強いリズムは、この天井の高い木造のホール中に響き渡って空間を気持ちよく満たすはずだ。下手したら、あれ、私歌わなくていいのでは？　となるかもしれない。それだけは避けたい。

会場に到着し、短い時間で楽器や音響装置のセッティングをする。係の方に「譜面台とマイクスタンドをお借りしたいのですが」とたずねると、「ホール後方の小部屋のなかにあります」と説明を受けた。ドアに近づいてみると「武器庫」という案内板がかけられている。農学校の生徒は屯田兵の指揮官になるため、二階の演舞場で兵式訓練を行っていたらしい。ここに訓練用の武器を入れていたのだなあと思いながらマイクスタンドを取り出し、どんな武器だったか知らないが、ためしにちょっとヤリみたいな持ち方で運んでみた。周りの人たちは準備に忙しそうで、誰ひとりそのことにつっこんではくれなかった。

この日のために選んだ衣装は、銀のスパンコールで埋め尽くされたギラギラのセッ

トアップだった。いかにもタイムトラベルできそうで、かつ時計台ホールに雰囲気負けしない洋服がいいなと思い探していたら、運良くこれに巡り合ったのだ。むしろこんな全身ギラギラ、タイムトラベルのイベント以外でいつ誰が着るためのものかよくわからない。パーティ用なのか、背中が何かの間違いかと思うほどざっくり開いている。なんだか怖いので前日に宿泊しているホテルの部屋でそのざっくり開いた部分を縫って閉じた。これでよし、私の背中は守られた。安心安心、と思って着てみたところ、上まで縫いすぎていたようでこんどは頭が入らない。自分のおっちょこちょいが情けなく、半泣きで無理やり力を入れて頭を突き出したら、ムシッ、と糸が耐えている音がして、ぎりぎり着ることができた。多分脱ぐ時にこの服は、破け散るだろう。

時計台の鐘が七回鳴った。私は脱ぐときに破け散る定めのギンギラギンの服をまとい、颯爽とステージに上がった。会社の忘年会を蹴ってタイムトラベルしにきてくれたかもしれない猛者たちはみんな、私を見て「服、ギンギラギンだな」という顔をした。一曲目は大貫妙子さんのカバーで『メトロポリタン美術館』。「タイムトラベルは楽し」というサビが印象的な、かわいいけれどどこかミステリアスな名曲だ。木製のベンチに並んで座り耳をすませているお客さんを見ると、教会で歌っている気がしたし、曲と歌詞の世界観から、みんなでミュージアムに来ている気もした。だけど本当はここは時計台ホールで、かつての農学校の演舞場だ。そしてあるときは図書館だった。ミルフィーユのような歴史の層の、どこにいるのかわからなくなるような浮遊感の果てに、私は歌いながら、同じ曲で始まった夏のライブのことを思い出していた。